

北村包彦先生の生涯

入澤 亮吉

東京医科大学皮膚科学分野講師

出生～大学

北村包彦は明治32(1899)年に神奈川県横須賀市に生まれた¹⁾。父は三浦一族の歴史を調査した郷土の史家であったと伝えられる²⁾。明治45(1912)年、横須賀市豊島小学校を卒業、大正5(1916)年、神奈川県立横須賀中学校を卒業し、第一高等学校第三部入学、大正8(1919)年に東京帝国大学医学部医学科に入学した¹⁾。大学4年のときに執筆した歌舞伎『延命院日当』と題する戯曲が大正11(1922)年に東京有楽座で上演されている³⁾。弟子たちのエピソードからは映画鑑賞が趣味で、映画監督になりたかったという口伝もあるので、その方面への興味は強かったものと推察される。

東京帝国大学医学部皮膚科入局～市立松本病院

大正12(1923)年6月の医学部卒業後は直ちに土肥慶蔵が教授を務める東京帝国大学医学部附属病院皮膚科・泌尿器科教室に副手として入局した。当時のことを北村はその回想録に以下のように綴っている。

「土肥先生は、その人に就きたい一念で、私は皮膚科を選んだとも云えるのだが、日本皮膚科学のまさしく開基として内外に声望の高かった先生は、もはや定年に近く、かつて多くの医局員を熱心に指導された時代は既に過ぎ、そのライフワークとも謂うべき世界梅毒史の執筆、日本性病予防協会の運営に従う傍ら、悠々学芸、詩文に遊ばれる風に見えた」⁴⁾。

入局当時は皮膚科雑誌や日本性病予防協会の機関誌である『體性』の編集を手伝った⁴⁾。大正15(1926)年、土肥が退官し、遠山郁三が教授に就任すると、遠山教授より鉤虫仔虫皮膚炎の研究を命ぜられる。農夫の肥(こえ)かぶれ研究のため、犬の糞便から培養した犬鉤虫の仔虫を使って犬の鉤虫仔虫皮膚炎を再現する実験であった⁵⁾。これは後の昭和5(1930)年に「十二指

腸虫仔虫に因る皮膚炎の実験的研究」⁶⁾として報告され、昭和6(1931)年の学位の取得に至る¹⁾。一方で遠山は教室員に対して、皮膚のメラニン量中等度の邦人には、白人、黒人では見逃される色素異常症が生ずると説いていた⁴⁾。これを受けて北村は手始めの仕事として、昭和元(1926)年に「小児スピッツェンピグメントニ關スル研究」を発表している⁷⁾。大学病院で1～65歳の200余人の外来患者を観察し、3～6歳が最多で以降は漸減しており、スピッツェンピグメントの原著と一致していたと報告した。昭和2(1927)年、市立松本病院(現信州大学医学部附属病院)皮膚科・泌尿器科初代医長として赴任¹⁾、翌年には結婚して生涯に長男一子を儲けている。

熊本医科大学～長崎医科大学

昭和4(1929)年12月には三宅 勇教授が主宰する熊本医科大学(現熊本大学医学部)に助教授として招かれる。ここで北村は家兔のクロトン油皮膚炎の対内的意義を求めた実験的研究の一部を分担した^{4,8)}。家兔のクロトン油皮膚炎が内臓諸器官、その機能に及ぼす影響の研究は皮膚病変の内向性影響に着眼した点で画期的な研究であったという。三宅教授はこの研究の各部分を各人に分配し、その結果をまとめて、共同研究として完成させるというスタイルをとった。北村は後にこの熊本時代について以下のように回想している。「私が皮膚科学、あるいはもっと広く医学の研究法、特にいろいろの実験方法、そしてもっと根本的には研究するということの意義について何かわかるようになったのは、熊本で三宅教授から有言、無言に教えられた結果であり、それを生涯の利益として感謝している」²⁾。

昭和10(1935)年、駒谷銀治教授の後任として長崎医科大学教授に就任し¹⁾、翌年には航路でナチス政権下のドイツに留学し、Schreus教授(Düsseldorf)、次

いでGottron教授(Breslau)に学ぶ傍ら国内の皮膚科教室を見学して回った⁹⁾。Schreus教授の下で狼瘡患者の尿中アスコルビン酸排泄の測定などの仕事をしつつ、稀有な症例を観察し、それを含めて一般に皮膚発疹の丹念な観察、叙述の仕方、臨床鑑別診断について学べたことを大きな成果であったと後に述べている⁹⁾。またGottron教授の下では外来患者をみるほか、研究室でさまざまな疾患の組織標本をみせてもらった。Gottron教授は皮膚疾患の内科的、病理学的、全医学的意義を常に深く省察し、所見を掴むだけで満足せず、所見の中に基本的な法則性を求める人であったと記している⁹⁾。2年の留学を終えて帰国途上にパリ、アメリカを視察して昭和13(1938)年に帰国した。帰国後、自身の教室での仕事が本格化するが、同年にincontinentia pigmentiの本邦第1例を報告し¹⁰⁾、太平洋戦争開戦の1年前である昭和15(1940)年には、長崎医科大学附属病院院長〔～昭和17(1942)年4月〕に就任¹⁾した。戦時下の昭和18(1943)年には後に網状肢端色素沈着症と命名した症例の最初の報告を行ったが、当時は「一種の対側性肢端色素沈着症」として発表している¹¹⁾。同年、長崎医科大学を退官した前任の駒谷銀治博士の要請に従って、寄生虫学の権威で上海自然科学研究所の小宮 孝博士とともに、上海で邦人が罹患する長江浮腫の研究を行う中で、北村は病変皮膚組織検索の方面を担当し、有棘顎口虫の仔虫体を発見した。小宮は上海のイヌ、ネコにその成虫、市販の淡水魚にその仔虫の寄生を証明した。これにより長江浮腫は上海ないし長江地方の在留邦人が好む淡水魚の生食に基づく顎口虫症と結論された¹²⁾。この研究により、北村がその後に勤めた東京医科大学退任後の昭和39(1964)年に第8回野口英世記念医学賞を受賞している¹²⁾。

昭和20(1945)年8月9日11時2分、原子爆弾が長崎医科大学より至近の上空で炸裂、北村は外来で診察中であつたが、気がつけば外の瓦礫の中にあり、顔面は傷だらけ、隣室の眼科教授が同じ状態で近くにあったが、後に破傷風で死亡した¹³⁾。皮膚科学教室(総員36人)は中山善敏助手以下12人(看護婦9人)が外来診察室、治療室、研究室等で爆死または被爆死亡¹⁴⁾。病院で病理切片を作成していたラボランチン(研究助手)嬢もムラージュを制作していた技師も原爆死するとともに、たくさんのムラージュも原爆の放射熱で蠟が溶けて崩れ去ってしまったという¹⁵⁾。

東京大学皮膚科教授時代

終戦直後の昭和20(1945)年10月の東京帝国大学皮膚科教授、太田正雄の死去に伴い、昭和21(1946)年6月、東京帝国大学医学部皮膚科学講座の教授に就任する¹⁾。このとき皮膚科と泌尿器科が独立講座となった。昭和23(1948)年には女子顔面黒皮症を報告したが、これは第1次世界大戦後ドイツに発生したリール黒皮症と同一症であるとした¹⁶⁾。同年には日本皮膚科学会理事長に就任したが、在任は昭和35(1960)年までの長期にわたった。その間、昭和24(1949)年の第48回日本皮膚科学会総会・学術大会を皮切りに同26(1951)年、29(1954)年、34(1959)年に会頭を担当している¹⁾。昭和28(1953)年、網状肢端色素沈着症を『Hautarzt』に報告したが¹⁷⁾、この報告は昭和18(1943)年の第1例目の症例に東京における経験例を加え、従来の先天性対側性色素異常症dyschromatosis hereditaria symmetricaとは別の疾患として、新たにacropigmentatio reticularisと命名して発表した。その後『Year Book of Dermatology and Syphilology』1953～1954版、『Rook's Textbook of Dermatology』1960第2版に掲載されたことから注目されて、イギリス人、イラン人その他の紹介症例とまったく同一な症状だと明らかにしたことで、本症は人種を超えて存在することが証明された^{18,19)}。網状肢端色素沈着症を発表した年、マドリッドで開催された第6回国際らい会議に日本代表として東京大学薬学部の石館守三教授と2人で出席した。この学会はらいのマドリッド分類で後に有名になったが、北村はWade博士を委員長とする病型分類委員会のメンバーとして討議に加わった。このとき、次の国際会議を日本でやらないかという話が出たが、インドが強力に申し出たため昭和33(1958)年はカルカッタでの開催が決まった。ところが同年6月になって突如インドが辞退してきたので急遽その年の秋に日本で引き受けることになったというエピソードを残している²⁰⁾。北村はこの学会の前後に各国の大学を歴訪し、スイスではジュネーブ大学のJadassohn教授、ドイツでは留学中の恩師であるSchreusおよびGottron教授など、パリではDegos教授、Merklen教授、さらに渡米してFitzpatrick教授と親交を深めた。

昭和31(1956)年、東京大学医学部附属病院病院



図 東京大学退官時、写真家・土門拳により撮影されたポートレート(入澤該吉蔵)

長身にダブルのスーツが似合う瀟洒な佇まい、回診時には糊のきいた白衣のボタンをかけずに片手をズボンのポケットに突っ込んでせかせかと歩いていた、温厚で怒ったことはほとんどないが「勉強しなさい、やっていますか?」と奮起を促すのが常であった(弟子たちによる追悼文集の記述より)

長、看護学校長、伝染病研究所教授を併任する傍ら、頬部～側頸部に生じる毛孔性角化性丘疹の密生を伴う紅褐色局面の成年男子の例を第343回東京地方会例会で症例供覧した。これは昭和35(1960)年に erythromelanosus follicularis faciei(顔面毛嚢性紅斑黒皮症)と命名され『Hautarzt』に掲載された²²⁾。昭和32(1957)年にはストックホルムで開催された第11回国際皮膚科学会議に日本代表として出席した。北村は“病名および分類委員会”と“皮膚科医教育方針委員会”の委員として参加した。この会議に続いて同市で開催された国際性病予防連盟にも出席した後、スイス、フランスを歴訪し帰国した。昭和33(1958)年5月には新潟で開催された総会において、土肥慶蔵教授記念国際皮膚科交換講座の第1回講演が開催されたが、この講座はその2年前の総会において、来日した Fitzpatrick 教授が国際交換講座を設けて継続事業にしてはどうか、さらには土肥慶蔵先生を記念してはどうかと北村らに提案したことから企画が始まったと

いう²⁴⁾。同年11月には前述の北村が会長を務める第7回国際らい会議が東京のサンケイホールで開催されたが、公用語は英語、スペイン語、フランス語の3カ国語でスイスから通訳を呼び寄せ、世界中から184名の参加者を迎えた^{20,24)}。この学会を手伝った医局の肥田野信(東京女子医科大学教授)は後に、日本のらい医学を国際的に知らしめるとともに、復興した日本の姿を諸外国のらい関係者に示すことができたと言懐している²⁰⁾。翌昭和34(1959)年、東京大学を定年退官となる¹⁾。

東京医科大学教授時代

昭和34(1959)年4月、東京大学を退官後直ちに東京医科大学皮膚科学講座の教授に就任した¹⁾。昭和37(1962)年、第12回国際皮膚科学会(ワシントン市)に出席した際には、国際皮膚科学会委員会委員に就任している〔～昭和42(1967)年〕¹⁾。翌年には東京通信病院院長に就任したためか、昭和38(1963)年には東京医科

大学皮膚科教授を辞任するが、後任には小嶋理一を教授に推した²³⁾。昭和42(1967)年、通信病院長を辞し¹⁾、東京医科大学学長に就任している²⁵⁾。当時小嶋教授は病院長の職にあり、ともに過熱するインターン問題について学生との折衝の矢面に立って物事を処理した。小嶋は「学生との団体交渉の席上、先生は学生の道を諄々と説かれた。紳士的な交渉に終始し、乱闘のような情勢には一度もならなかったのは先生の人格しからしめたものである」と語っている。学会関係では昭和37(1962)年に第12回日本アレルギー学会総会会長を¹⁾、また昭和47(1972)年には第8回サルコイドーシス国際会議を東京で開催し会長を務めた¹⁾。執筆活動としては昭和43(1968)年に臨床皮膚科全書(全5巻)を編集、北村包彦、小嶋理一、川村太郎、安田利顕によって刊行している²⁶⁾。本書は研究的皮膚科学と臨床皮膚科学のうち皮膚科学の本筋といえる臨床皮膚科学書たることを志して計画されたと序に記載されている。北村は第1章皮膚科学概論を担当し、記載皮膚科学deskriptionsdermatologieの重要性を説き、さらには皮膚疾患を体に内在する病的過程の皮膚反映とみようとす傾向を指摘、病理組織学的所見を含めた形態学的な観察に加え、機能的なものへ向け理解が進められていると解説。さらに診断についてはゲーテの言葉を引用し、ことに皮膚疾患の心得とするよう説いた。

「Was ist das Schwerste von allem ?

Was dir das Leichteste dünkt :

Mit den Augen zu sehen.

Was vor den Augen dir liegt.」 Goethe

一番むずかしいことは何だろう？ それは一番や

さしくみえること、すなわち眼で眼の前にあるものをみることである(日本語訳は他文献²⁷⁾より引用)。

昭和47(1972)年、勲二等瑞宝章受賞¹⁾。平成元(1989)年、原発性アミロイドーシスによる心不全により逝去、享年90歳、叙従三位¹⁾。

〈文献〉

- 1) 北村包彦先生追悼文集発行委員会：北村包彦先生追悼文集，p234，1992
- 2) 阿部羊一郎：北村包彦先生追悼文集，p234，1992
- 3) 東京医科大学：東京医大新聞 昭和48年12月15日号，p3，1973
- 4) 北村包彦：皮膚臨床 28：707，1986
- 5) 北村包彦：皮膚臨床 10：643，1968
- 6) 北村包彦：皮膚科及泌尿器科雑誌 30：279，1930
- 7) 北村包彦：皮膚科及泌尿器科雑誌 26：524，1926
- 8) 北村包彦：皮膚病診療 6：364，1984
- 9) 北村包彦：皮膚臨床 13：89，1971
- 10) 北村包彦：皮膚と泌尿 6：632，1938
- 11) 北村包彦，ほか：臨牀の皮膚泌尿と其境域 8：201，1943
- 12) 北村包彦：皮膚臨床 7：189，1965
- 13) 福代良一：北村包彦先生追悼文集，p57，1992
- 14) 長崎市：ながさきの平和 長崎医科大学等 https://nagasakipeace.jp/search/about_abm/gallery/ikadai.html (2025.10.17 アクセス)
- 15) 野北道夫：北村包彦先生追悼文集，p47，1992
- 16) 北村包彦，ほか：皮膚科性病科雑誌 58：22，1948
- 17) Kitamura K, et al : Hautarzt 4：152，1953
- 18) 北村包彦：診断と治療 43：447，1955
- 19) 北村包彦：皮膚臨床 21：433，1979
- 20) 肥田野信：北村包彦先生追悼文集，p119，1992
- 21) 北村包彦：皮膚科最近の進歩 3，医歯薬出版，東京，p251，1960
- 22) Kitamura K, et al : Hautarzt 11：391，1960
- 23) 北村包彦：日本皮膚科学會雑誌 67：723，1957
- 24) 北村包彦：医事新報 1814：3，1959
- 25) 東京医科大学五十年史編纂委員会：東京医科大学50年史，東京医科大学，東京，p392，1971
- 26) 北村包彦，ほか：臨床皮膚科全書，金原出版，東京，p1，1968
- 27) 北村包彦：自然 5：53，1950
- 28) 久木田淳：北村包彦先生追悼文集，p92，1992

あとがき

北村の生涯を振り返ると学生時代こそ太田正雄のごとき文芸への憧れがあったようであるが、東京帝大皮膚科入局後からはほとんどその方面の動きは感じられなくなる。おそらく尊敬してやまなかったであろう二足の草鞋を履いた太田正雄の手法は困難と考えて、きっぱり棄てたのだと思う。その後はひたすら皮膚科学一途に過ごしている。その根幹を成すものはドイツで習得した記載皮膚科学であろう。その精緻な観察に基づくこれまた見事な描写がなければ、網状肢端色素沈着症をはじめとする色素沈着症の多

くの業績は残せなかったと思う。後年は東大教授として学会の主催、国際学会での各種委員を歴任し、日本の皮膚科学会を牽引した。昭和57(1982)年、第16回国際皮膚科学会が東京で開催された。国際皮膚科学会の歴史を通じ、開催地が欧米の大陸を離れて初めて極東の地である東京が選出されたという意味で意義深い学会であった。会頭であった久木田 淳が後に北村の追悼文集に、「北村の国際皮膚科委員会時代における活躍の賜物であった」と語っているのはあながち謙遜の心のみではあるまい。